

# 二度と会えないなんて

311から4年

## 鎮魂の祈り

悔しいし、情けないよ。自分の親を自分の手で捜せなかったんだから。この思いは一生背負っていくよ。

南相馬市小高区井田川の宮口公一さん(57)は、無念さを抱えながら4年の歳月を過ごしてきた。避難先の同市原町区の仮設住宅に並ぶ父貝治さん(75)と母キクさん(76)の遺影。写真の中の2人は、生前と同じように仲むつまじく寄り添っている。

(東日本大震災があった)あの日の朝は、いつものように仕事に出掛けたんだ。「行ってきます」って言うと、母が「気を付けて行ってらっしゃい」って。二度と会えないなんて、想像もしなかったよ。

最後の会話は今でも覚えている。貝治さんは温厚で人当たりが良く、宮口さんは怒られた記

## 南相馬・小高で両親を亡くした宮口さん



避難先の仮設住宅で、両親の遺影に手を合わせる宮口さん。自分の手で遺体を捜せなかったことを今でも悔いる  
=南相馬市原町区の仮設住宅



貝治さんとキクさん

憶がない。その分、キクさんには大人になってからも服装などを注意された。仕事を終えた宮口さんが自宅近くの避難所に駆け付けたのは、震災翌日の午前2時ごろ。そこに両親の姿はなかった。近所の知り合いから2人が避難しなかったことを聞き、希望はしぼんだ。両親は全壊した自宅ごと津波で流されたと考えている。

避難中も両親のことが頭から離れなかった。でも、原発事故で小高に入れなくなった。遺体安置所に何度も通ったよ。

約1カ月間、避難で県内外を転々とした。南相馬市に戻った2011(平成23)年4月から毎日のように遺体の安置所に通い、両親を捜した。

同6月にDNA鑑定の結果から、両親の身元が特定された。しかし、時は待ってくれなかった。既に2人の亡きがらは焼かれ、遺骨になっていた。両親の最期をみとれなかった悔しさを何度ぶつけても、国と東京電力からは、いまだに謝罪がない。そのことが、余計に悔しい。

もうすぐ市内の高台に自宅を新築する。納骨は、それから。新しい家を両親に見てもらってからじゃないと、あまりに申し訳ない。

今も遺影に手を合わせる度、自分で両親を見つけれなかったことをわびている。



(谷口隆治)